

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2018年4月7日

文責：JUN

子どもの学びがみえるかみえないか 「主体的・対話的学び」実現の鍵、そこにあり

1 「促進する」という教師のはたらき

どんなことでもそうだが、実のある物事はやり方だけでは実現しない。特に、芸術や教育はそうだ。芸術は美的感性と技術がなければよいものは生まれず、教育は子どもと題材の切り結びの事実に応じて作り出すものでなければ力を持たない。型通り、マニュアル通りにやることができるものではない。

新学習指導要領への移行期一年目の本年度、いよいよ「主体的・対話的で深い学び」による授業改善を本格化させることになる。その一年の始まりの今、冒頭に述べたことをしっかり認識しなければならない。間違っても、型に当て嵌める授業、プラン通り子どもに任せてしまう授業にしてはならない。

「主体的」だから教師の指示に従って行うのではなく子どもが自分たちで考えて取り組むことになるのだし、「対話的」だから子どもと子どもの対話によって学びが進められるのだけれど、それが「深い学び」に至るには、子どもの取り組みが進展するように「促進する」教師のはたらきがなければならない。もちろん、それは従来型の「教える」というはたらきではない。

その「促進する」というはたらきは、どのようにすればよいのだろうか。もちろん、それはこのようにすればよいと説明できるようなものではない。子どもの取り組みは千差万別、学校によって、教室によって、子どもによって、題材によって、子どもと子どもの関係によって、つまりその時の状況によってまったく異なる様相を呈する。その決して一様ではない子どもの学びの状況に応じる、それが「促進する」というはたらきである。

となると、一様ではない子どもの状況がみえなかったら「促進する」というはたらきはできないということになる。つまり、子どもの学びの事実がみえるかみえないか、そこに「主体的・対話的で深い学び」実現の鍵があるということになる。このことについては昨年10月発行の本たよりで一度述べたことだが、移行期一年目の出発にあたりもう一度記すことにしたい。

2 「みえる」とは何がみえることなのか

はっきりしていないといけないのは、何がみえるようになるとよいのかである。「みえる」とは言っても、授業を見ていればだれもが何かはみえているのである。前述したHさんも自分の授業においてたくさんの方がみえていたはずである。にもかかわらず彼女は「毎日一生懸命子どものことをみているのにみえない」と嘆き「悔しい」と言っている。それは、子どもの学びを「促進する」ためにみえなければいけないとても重要なものが「みえていない」ことへの嘆きだと言える。それがみえたらどんなに

いいだろう、そう願う教師はHさんだけではなくたくさんいるにちがいない。

2014年に上梓した拙著『続・教師の話し方・聴き方』（ぎょうせい）に、「子どもの学びがみえる」ということに関して私は次のように記している。

「みる」ということの奥深さ

「みる」ということは、教室内の子ども一人ひとりがどう学んでいるかをとらえるということです。子どもの語ること一つひとつを聴きとるということです。子どもと子どもがどうかかわって学んでいるか、そのつながりを感じとるということです。教師としてそれは当然のはたらきだと言えそうですが、それがいかに難しいことであるかは前述しました。

そのうえ、どれだけその気になって眺めても、耳を澄ましても、もっとみえにくいことがあるのです。例えば次のようなことです。

教師の発問を受けた子どもが、どう答えてよいかわからず固まってしまうことがあります。その子どもの表情はみようとさえすればみることができます。しかし、なぜそうなったかまでみえるでしょうか。

教師の指名を受けて答えた子どもの答えが間違いであったとします。それが間違いであることはだれにでもわかることです。けれども、どのように考えて間違いになったのか、そして、その間違いにどういう学びの可能性が潜んでいるのかまでみえるでしょうか。

教師の問いに対してある子どもの答えたことが、あまりにも意外なことだったとします。それが多くの子どもが考えそうなことではなくどちらかと言うと突飛なことだということはだれにでもわかることです。けれども、もしその考えに、その教材の本質を深める可能性が潜んでいたとしたら、それがとっさにみえるでしょうか。

全員で学び合っていたとき、一人の子どもがあることを発言したとします。何分もたってから、別の子どもが一人目の子どもとほぼ同じ考えを述べたとします。そうしたところ二人目の子どもの考えに何人もの子どもが反応して学級の考えが一気に深まっていったとしましょう。この状況に対して、深まりの契機をつくったのは、二人目の子どもではなく、一人目の子どもだったことがみえるでしょうか。二人目の子どもの発言が一人目の子どもの考えに触発されたものだったことがみえるでしょうか。

ある子どもが三度発言をしたとします。その一つひとつの発言内容を個別に聴きとることはそれほど難しいことはありません。その子どもが、この時間の学びに意欲的になっていたこともわかるでしょう。けれども、その三度の発言にどんなつながりがあり、その子どもが何を強く感じていたのか、その子どもの学びのストーリーがみえるでしょうか。

ある問題に取り組んでいた子どもが、何も書けずに真っ白なノートの前で、じっと考え込んでいたとします。その子が教師の出した問題が解けずに困っていることはだれがみてもわかります。けれども、隣の席の子どもがそっとその子に話しかけた直後、それまでの困りきった表情がぱっとゆるんだとします。その瞬間をみることができるでしょうか。そして、二人の間でどんなやりとりがあったかまでわかるでしょうか。

学ぶ子どものありようは、こんなにも多様で複雑で、往々にして教師の予測を超えて生まれるものなのです。けれどもそれだからこそ魅力に富んでいるのです。授業をすれば、それが次々と生ま

れ複雑にからみ合います。そう考えると、これらすべてをとらえることは難しいとしても、少しでも多くみえていたいと思います。みえることでそうした子どもの状況に応じることができるからです。そのためには、よく子どもを観察するよう心がけたいものですが、そのとき子どものことばに耳を澄ませることも大切です。事実がよくみえる教師は、よくみてよく聴いている教師なのです。

ここに記していることは、さまざまな授業に通じることであり、「主体的・対話的で深い学び」におけることとして書いたものではない。どちらかと言うと、教師が進める全体授業におけることという色合いが強い。それに対して、「主体的・対話的な学び」においては、子どもたちが対話をしながら探究していく場面が多くなる。そういう時に子どもの中に何が起きているかを「みる」ということはなお難しいこととなる。それだけに、教師は全神経を敏感に働かせ、子どもの言葉に耳を傾け、子どもの表情を見つめ、そんな子どもの様子から学びのゆくえを予想して、いつどのようにささえるか考えなければならぬのではないだろうか。

5 「主体的・対話的で深い学び」を促進するために

移行期に入り、さまざまな教育誌や新聞を見ると、確実に「主体的・対話的で深い学び」への取り組みが進められている。しかし、そうした記事を見て私が危惧するのは、教師の指導のあり方に傾斜していることである。もちろん、教師が従来型の授業から転換しない限り「主体的・対話的で深い学び」は生まれにくい。けれども、どう授業するかという発想で考えているうちは、その転換は難しいということに認識すべきである。教師は、「授業」という考えから「子どもの学び」という考えへの切り替えをしなければいけない。なぜなら、主体的に学ぶのは子どもだからである。

何度も言う。学ぶのは子どもである。だから、子ども自身が意欲を抱き、課題意識をもち、探究心を燃やして、それぞれに思考し、困ったことがあったら仲間へ尋ね、難しい課題には仲間と考えを擦り合わせ、自分たちで発見していくことが望ましい。そのように行う学びは、その過程の1コマ1コマで子どもが自らの意思をはたかせ、子ども自身が考え切り開こうとする。それは、ただ教師に教えられる勉強とは全くちがう質のものになるにちがいない。

しかし、そのような学びは子どもに任せればずっとできるものではない。どういう課題を取り上げるかが極めて重要だし、対話的に学び合う学び方を日常的に行い精錬させることも大切である。教師としてどう指導するかという考え方が必要なのだとしたら、それは、教える指導ではなく子どもを対話的に学べるようにするための指導なのだろう。

それにしても、子どもと子どもが「対話」できるようにするということは、日本では極めて難しいことである。このことはいずれ詳述しなければならないと思っているのだが、子どもに話し合わせれば対話になるというような生易しいことではないからである。

そして、もう一つが、「深い学び」に至るために、なんとしても必要なのが、子どもの学びが「みえる」という教師の感覚というか洞察だということである。とにかくそこで生まれている子どもの事実に応じて「促進する」対応を教師がしなければ「深い学び」には至らないからである。

とは言っても、「みえる」ということは言葉ほど簡単なことではない。そこに、「主体的・対話的で深い学び」実現の鍵があるのだが、それだけに、今、教師たちは、手っ取り早いやり方を知ることよりも、「みえる」難しさに立ち向かう覚悟をしなければならない。これは私の教師たちへの警鐘である。